

エゾマツ

10周年特集号



No. 38

1996.10.20

北海道ボランティアレンジャー協議会

目次

1. 巻頭言 10年の歩みを顧みて 会長 大友 健 (1)
2. ごあいさつ 北海道保健環境部環境室自然保護課長 青柳 正英 (4)
3. 北海道ボランティア・レンジャー協議会結成10周年に寄せて 北海道野幌森林公園事務所長 若槻 明男 (7)
4. 「北海道ボランティア・レンジャー協議会」10周年の節目に当たって 副会長・事務局長 佐々木幸夫 (9)
5. 結成10周年に想う (12)
6. 各地での活躍 (13)
7. 自然体験塾 猪師 勉 (15)
8. 新会員紹介 (16)
9. 『一冊の本』と『自然』への思いなど 小山賢一郎 (17)
10. 共に得た感動から 小泉 三雄 (22)
11. 野幌森林公園の野鳥 大槻日出男 (24)
12. 北海道ボランティア・レンジャー協議会の発展を願って ~アンケート実施とその結果~ (30)
13. 北海道ボランティア・レンジャー協議会10年の歩み(年譜) (34)
14. 平成8年度総会報告 (42)
15. 平成8年度~9年度 地方幹事 (43)
16. 今後の自然観察 (44)
17. 編集後記 (45)

10年の歩みを顧みて

会 長 大 友 健

1986年6月、第1回ボランティア・レンジャー育成講習会が、支笏洞爺国立公園内の国民休暇村で開催され「人間と自然との橋渡し役」という情熱に燃えた仲間が、今後の研鑽の場として結成したのが「エゾマツ会」の発足であり、会の情報誌も「エゾマツ」として半年後に、第1号が発刊された。

以来、会員の増にともない、会の組織、執行体制の確立が論議され、今後の活動の在り方なども含め、発展的な組織ということで「北海道ボランティア・レンジャー協議会」と改組して、専門部の企画立案をもとに行動することにした。会の理念とも言うべき、人々に自然の有り難さ、大切さを理解していただく糸口を機会あるごとに伝え理解していただくボランティア活動を続け、もう10年目を迎えたのである。

この健全な会の歩みを振り返るとき、今は亡き初代会長の「河村さん」はじめ、たくさんの方々が基礎作りに、豊富な経験と英知をくださり、それらを会員の理解と協力が、大きく今日の協議会を育み育てたものと、二代会長職の私は心から会員各位、そしてご指導いただいた関係機関の方々の、大きな力があつたことは忘れられず、感謝の念を抱かざるを得ないのである。

よき理解者に恵まれ、活動家の仲間が、設立目的を堅持して、会員個々の理解と協力に合わせて、行政の支援が大きかったことは当然として、今日の歩み

の力強さに、仲間意識の強さということ、数々の事例に改めて感じさせられるのである。

しばし省みると、いろいろな経緯が当然そこにあり、それを乗り越え乗り越え創立10周年を迎えた今日であるとも思えるのである。

会員の仲間意識は、時代と共に高まり、年間の自然観察会においても、関係機関より高い評価を頂き、会員共々励みとなり、よいよい発展につながりをなしていることはご承知の通りである。

私たちは、機会ある度に組織的に、あるいは個人的にフィールドをもちながら自然によりよく親しみ、知識を疑問から得るべきである。

発足当時の会報「エゾマツ」も、年間4回を一度も休刊することなく、会員の声を聞き、情報を伝えながら、充実に努めていることは当会の発展に寄与するところ大と、担当にあたった各位に改めて感謝し、全道各地に居住している会員の、心のきずなとして今後も、会員同士の交流の一助となっていくことを期待して止まないのである。

今後の社会は当然、よい環境を未来に引き継ぐ、いわゆる21世紀に向けての、自然への関心の高まりとして、豊かな森林にさまざまな野生生物が息づく素晴らしい自然環境は、自然にひたりゆとりを求める人々の、意識変化などを背景に利活用面においても多様化が求められて来ることと思われるのである。

それら動きの中にあっても、我々の役割そのものは大きく変わらず、適正な保護管理を推進する行政に十分な理解をもちながら、自然、生物と人との触れ合いを保ち、共生のなかにも利活用の楽しみが感じられるような、自然との接し方を多方面から理解していただく必要性が出てくることは当然である。

私たちは、進んで他の機関が開く観察会にも参加し、実践のなかで学び、今日求められている質の向上にはげみ人々に接し、発揮して魅力あふれた活動家になるべきではないだろうか。

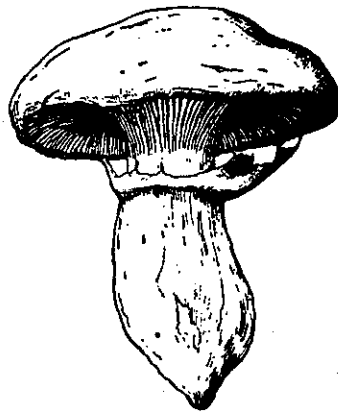
幅広く、自然を語り得るためにも、各自が得意の分野をもち、会員による会員内研修を重ね、幅広く自然の関連性をかたり得ることは、自分自身に大きなよろこびと、人々に大きな感動を与えることになると思うのである。

そもそも私たちの活動の原点は、ボランティアによる自然に親しむ運動の社会奉仕であることも忘れてはならないことの一つである。自分にあつた身の回りのことから手掛け、相手のニーズに併せて長く継続して活動する事が大切で、さらに協力者・援助者であるという謙虚さのうちにも、絶えず学習をし、自分を成長させるという主要な心構えを見失うことなく、素晴らしい自然環境の形成維持のための社会奉仕の一員という自覚である。

近年は、自然保護、環境保護の高まりの中、行政は勿論、法人団体においても、レンジャーまたはインストラクターの養成を行い、年々同志が増え環境教育が充実されていくことはうれしい限りである。

私たちの協議会も、地方の活動をサポートしたり、機会に恵まれない会員の方々と連携したり、意見交換を重ね、全道的なネットワークを張り巡らしていかなければならない。

この10年の歩みを礎に輝かしい発展と業績を重ねられるよう、会員各位のご理解、ご協力をお願いし、10の節目を共々祝福したく、ご挨拶とします。



もみたけ
Catathelasma ventricosum Sing.
(= *Armillaria ventricosa* Peck)

ご あ い さ つ

北海道保健環境部環境室自然保護課長 青柳 正英

ボランティア・レンジャーの皆様こんにちは。

私は今年4月、自然保護課に参りました青柳でございます。前任の大野課長同様、よろしく願い申し上げます。

さて、今年は道に自然保護課が創設されて満25年になります。当時私は、新設されたばかりの自然保護課で、全国にさきがけて制定された「北海道自然保護条例」に基づく保護地区の指定で走り回っていました。そして、この4月、23年ぶりに古巣に戻ってきました。以来数か月、この間に体験したエコロジカルな話題やら私見の一端を述べさせていただきます、ご挨拶とします。

7月下旬、富士山麓の田貫湖畔で開催された第38回自然公園大会に参加し、その帰りに郷里の山梨に立ち寄り、しばらくぶりに森林の手入れを思い立った。

造林地はいずれも同じで、必要な保育は間伐や枝打ち、それに蔓切りである。なかでも夏の時期に効果があるのが蔓切りであり、数年前に一応実施しているので大したことはないと思っていたが、中には腕くらい太い蔓が幹をよじ登り樹冠を覆っていた。蔓類はキズタ、ゴトウズル、ヤマブドウ、フジなど数種であり、数年で大きな木を丸ごと覆い尽くすほどの生長をするが、根元をナタなどで切断して置けば、いとも簡単に枯らすことが出来る。このようにして蔓を退治し、持ってきた握り飯を頬張っていると、突然近くで人の声があった。見ると、鳶職のような身軽な服装で、釣竿のようなものを持った見知らぬ二人が、我が森林内を走り回っているではないか。

何ですか？と聞くと、へボ取りですと答えが帰ってきた。へボというのはいかしの。数十年ぶりに聞く言葉である。黒い小さなジバチ（正確にはクロスズメバチ）を言う甲信地方の方言である。

彼らは諏訪地方から隣の我が森林まで蜂を求めてやってきたのである。目当ては蜂の子である。彼らの蜂の巣探しはファーブルの昆虫記さながらである。

先ず、蜂が居そうなところに1m位の細い棒を立て、その先端にマスの胴をぶつ切りにした2cm位の生身を刺し、ジッと待つ。すると、どこからともなくへボが飛んできてマスの身にとまる。蜂はマスの身をかみ取って肉団子にし、足で抱き抱えるようにして自分達の巣に運ぶ。今ごろは、セミやへびなどの抜け穴を利用して地中に作った、およそ直径

10数cmの灰色の巣は数段に分かれ、多くの幼虫（蜂の子）が育っているという。この穴に、蜂がヨレヨレになるような葉をスプレーでかけ、巣毎掘取り、そっくり自宅の庭に移し替え、幼虫が大きくなった頃を見計らって再び掘取り、蜂の子を佃煮にして正月に食べるのだと言う。

ところで面白いのは蜂の巣探しである。あらかじめ、違う種類の蜂の幼虫の白い皮を丸めた肉団子を作っておき、それに1cm×0.5cm位の白い和紙をテグスでつないで目印とし、蜂がマスの切れ身にとまって肉片をかみ取ろうとしているところに、そっと後ろから近付き、尻尾の方からこの肉団子を口の方に押しあげる。すると、蜂は手ごろの塊が手に入ったので、それをしっかり足で抱えて飛び立つ。あとは、その白い目印を追って、巣に案内させると言う仕掛である。話を聞きながら見ていると、一匹の蜂がマスの切れ身にとまり噛みだした。さっそく講釈どおり目印の付いた肉片を取り出し、下から押し上げる。すると蜂はそれを抱え込むようにして飛立った。これは面白いと見ていると、蜂は紙の目印が邪魔になって上手く飛べず、すぐ近くのスギの幹の高いところにとまり、肉塊に付いているテグスを噛み切り、荷を軽くしようとする、付け人はそうはさせじと釣竿のようなもので蜂を追い立てる。すると蜂は飛び立つがまたすぐ近くのスギの木にとまり、羽を休ませながら噛み切ろうとする。こんなことを繰り返している内に、蜂を見失うか、蜂は重い荷物を放棄するか、または、どこかで噛みきって無事巣に運んで再度肉団子作りやってくる。

うまく行くと、蜂は一直線に巣に戻り、おかげで巣毎掘とられてしまう。これが目的で二人一組となって遥か隣県から毎年のように我が森林に来るのである。そして傾斜の厳しい山の斜面を蜂を追って朝から晩まで走り回るのである。これは単に佃煮がうまいとかと言う問題でなく、こうしていると、一日がアッという間に過ぎ、ストレスは解消され、その上、金はかからず「最高の道楽だ」と言っている。そうこうしていると彼の相棒が“見つけた見つけた”と大きな声で叫んでいる。彼は40度に近い斜面を100m近く追跡し、やっと捜し当てたようである。私もそこまで登っていってみると、地表に直径1.5cm位の穴が開いており、しきりに小さな蜂が出入りしていた。

私も子供の頃、スズメバチやトックリバチの巣にいたずらしたことがあるが、こんな地味な小さな蜂には興味が湧かず、隣の森林の手入れに移っていった。

昔から信濃にはゲテ物食いが多いと聞いていたが、自分の森林にこんなして実際にやって来て、蜂の巣探しをしているのを見ると、段々興味が湧いてきて、最後まで見届けておかなかったことを、今では残念に思っている。

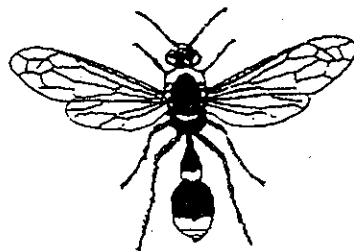
話は変わるが、私達の学生時代には生物学といえば、分類だとか発生だとか、なんとも暗記本位の学科で、しかも、生物学を専攻しても高校の先生以外にこれといった就職もなく、人気のない学科であった。

しかし、昭和40年代になると生態学というような分野が脚光を浴びてくるようになり、物質生産、物質循環、食物連鎖、エコシステムなどが話題となってきた。それは今から振り返ってみると、高度経済成長に先鞭をつけた物理学などは実験という手段により、ある一定の条件下ではいつでもどこでも同じ結果が得られ、しかも実用的で、近代科学の名を欲しいままにしたため、パツとしない生物学も、生き物なんていうドロ臭いものを相手にするよりも、遺伝子だのDNAだのと、電子顕微鏡下の世界での生命現象や遺伝機構の解明などに走った。その結果、生物学は素人はもとより身近な生き物産にとっても、いよいよ無縁の学問となってしまった。しかし、最近になって、環境問題は一層深刻さを増し、地球規模で警鐘が鳴らされるようになり、「帰ってきたファーブル」などという本が話題になるなど、再び「生き物」を対象とする生物学、かつての博物学が省みられるようになってきた。これらに呼応するように、人々の自然への回帰が増大し、これらの人達を対象とする「自然の案内人」が必要となってきた。しかし、現状は、あの23万haに及ぶ広大な大雪山国立公園において、わずか数名のレンジャーでは年間に訪れる約600万人に対応できないのは明白である。

人々が自然に回帰する理由は色々考えられるが、最大な要因は優れた環境を自らの目で見、触れ、肌で感じとることであろう。

そもそも環境とは、寒暖計や降雨計などアメダスでとらえられた物理的な情報ではなく、「生物が認識し得る世界がその生物にとっての環境である」と、今は亡き今西錦司氏は述べている。外的状況を”生き物をフィルターとして、生き物の側から相対的にとらえること”といえよう。それゆえ、自然環境の保全という場合の環境とは、物理的な外的状況でなく、ましてや、いま流行の「環境に優しい〇〇」などという言葉遊びでなく、純粋に生物の側（生物学的視点）に立ち、種の多様性を保全対象とし、その生態系の構成要素であるあらゆる生物が生存・生息していく上で欠くことの出来ない内的・外的条件の維持、増進、保全が問われていると考える。

今年一年、皆様の一層のご活躍とご健勝を祈念し筆を置きます。



北海道ボランティア・レンジャー協議会結成10周年に寄せて

北海道野幌森林公園事務所長 若 槻 明 男

北海道ボランティア・レンジャー協議会が結成10周年を迎えましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴協議会は、会員の方々の自然保護意識の高揚と自然保護思想の普及啓発などを目的に結成され、道内各地を舞台に自然観察会や研修会を積極的に実施されており、会の活動趣旨である「自然と人の橋渡し役」としての成果も着々とあげられているところであり、その活動に対し敬意を表するものであります。

野幌森林公園事務所としては、一般道民の方々を対象に自然観察会を以前から開催し、職員が案内役を努めておりましたが、幸い、1987年からは貴協議会のご協力を得られることとなりましたので、それまで年間数回の事務所主催の観察会は、年間8回の開催となり、貴協議会主催の森林公園内観察会の4回と併せ、毎月開催することが可能となりました。

また、自然観察会における、貴協議会の活動状況につきましては、多いときには20名を超える会員の方々の参加を得ており、一般参加者に対する自然解説体制は万全とのことであり、このことについて改めて厚くお礼申し上げます。

昨年度に、当事務所と貴協議会で行った観察会参加者に対するアンケート調査によりますと、回答のあった方の90%から「楽しかった」との感想をいただいておりますが、これもひとえに、会員の皆様方の日頃の自然解説に対する研さんのたまものと思います。

さて、すでにご承知のことと思いますが、今後数年かけて森林公園内の休養園地区において、身体の不自由な方や高齢者等でも利用できる遊歩道や園地広場などの整備や「自然誌ふれあい交流館」の建設を進めることとしております。

この「交流館」の中に、以前から課題でありましたレンジャーの活動拠点となる一室を設けることができないか現在検討中であり、私としては、この

実現に努めたいと思っております。

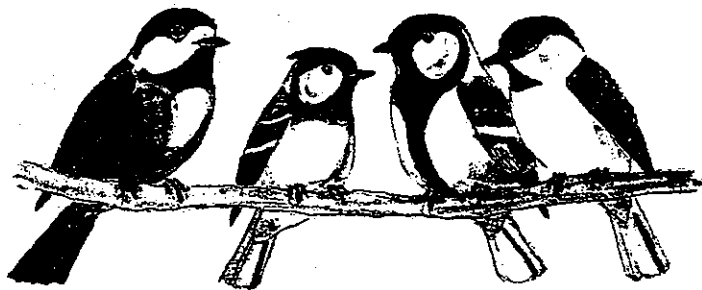
野幌森林公園の利用者数が年間百万人を超える状況になってきており、そのうち森林を利用される方々も約30万人にのぼっております。

原始の面影を残した森林公園というのがこの公園のキャッチフレーズであり、道外からの来園者の評価も高いものがありますが、利用者の増加の反面、色々の意味で本来の自然が失われつつあるのは、この公園も例外ではありません。

公園事務所としては、今後も、公園内の動植物の生態や植生などについての正しい知識の普及や貴重な自然の保護思想の啓発活動がより必要と考えておりますが、このための貴協議会のご支援は欠かせないものでありますので、今後とも格別なご協力をお願いいたします。

地球的規模で自然環境についての保護や利用の方法が問題とされている時代であり、今後、人々の自然環境への興味や自然の利用が拡大していくものと考えられますが、自然の正しい理解者、自然利用の指導者としての貴協議会及び貴会員の更なる活躍が各方面から期待されているところであります。

最後に、このような時代にあたり、北海道ボランティア・レンジャー協議会が益々ご発展され、また、会員の皆様方の一層のご活躍をご祈念申し上げお祝いの言葉といたします。



「北海道ボランティア・レンジャー協議会」10周年の節目に当たって

副会長・事務局長 佐々木 幸 夫

田村広報部長（10周年記念事業実行委員会委員長）から、10周年記念特集号に協議会の現在までの経緯と将来について、事務局の立場で投稿するように依頼があった。これから書き記す内容は、広報部長の意に沿うものかどうか分からないが多分に私見を加えたもので、その責を果たしたい。

記録によると、第1回のボランティア・レンジャー育成研修会は、千歳市支笏湖畔国民休暇村で昭和61年（1986年）8月29日（金）～31日（日）の3日間、38名研修を終え初めてのボランティア・レンジャー（自然解説員）が誕生した。そのボランティア・レンジャーの一部有志がより目的達成のために、組織化が必要と年の瀬もさし迫った12月の6日、設立総会を開き「エゾマツ会」を組織（会員36名）し、積極的な自己研修を中心としたプログラムに、関係機関との密接な連繫を重視したかたちで発足した。当時の会報「エゾマツ」を見ると、先輩諸氏のご努力が容易に推測される。

このように協議会が今日あるのは、先輩諸氏のご努力があったからこそで、ここに改めて、協議会に関与した先輩各位に心から敬意と感謝の念を表したい。

また、会員として在籍中に他界された横山孝さん（第1期苫小牧市）、河村千束さん（第1期札幌市）、山口慶彦さん（第6期岩見沢市）、川竹健二さん（第4期札幌市）、仙庭秀弘さん（第5期えりも町）の霊に黙祷を捧げたい。

とくに河村さんには協議会草創期から、会長職を勤められて大変なご苦勞があったし、山口さんは研修部長として、足繁く岩見沢から野幌の森に通いながらの献身的な活動で、その姿がつい昨日のように思い出される。

1986年から現在までの在籍会員数は、ボランティア・レンジャー育成研修会の回数が増えるにつれて増加しているが、退会された会員も相当数にのぼる。その中には、組織の中核としてご活躍された方が、現在他の組織のおられることを知り、その当時の心境をもし出来るものなら聞いて、協議会の改善策に役立てられたらと思っているが、まだ実現していない。

ボランティア・レンジャー育成研修会は1986年から1989年まで年1回、1990年から1992年の3年間は年2回、そして1993年から現在まで年1回のペースで開かれているので、実にその研修を了した者の数は617名に及び、わたくしたちの北海道ボランティア・レンジャー協議会会員数も本年3月時点の会員数に本年加入した会員21名を加えると約170名になる。

しかし、3月時点の会員の中から、すでに脱会したいとの意志表示があった会員が何名かおられ、さらにこの記念特集号にあわせて本年度の会費納入の振替用紙を同封したが、その段階で脱退される会員も予測されるので、多分165名を結果的に切るだろう。

さて、617名のうち170名が会員とすれば、その加入率は約30%に近い。この数字が少ないか多いかは論議のあるところであるが、わたくし自身としては、他にこれに類する組織がない今日、せめて研修者数の半分会員であればと思っているが、会員各位はどのように考えるであろうか。

協議会の前身「エゾマツ会」は、年会費1,500円で発足したが、2年目の総会で倍増の3,000円にして今日に至っている。

いずれにしても、ボランティア・レンジャー育成研修会は、財政上の点や人員の確保から永續はされないで、今後は既存のボランティア・レンジャーの中から会員の新規発掘を検討しなければならない。協議会が会員にとって魅力的な存在であれば加入率は高まり、なければ低くなるのは当然の理であり、今後わたくしたちが、魅力ある組織にすることこそ与えられた使命であると思っている。

協議会の活動については、総会で承認された事項は当然実施するものであるが、さらに役員会を通じ、目的に沿うものは積極的に対応する姿勢で臨んでいる。

逐年自然観察会に携わる回数が増加し、その対応に忙しいこの頃だが、とくに、自然観察会は野幌森林公園をホームグラウンドにしているし、また、公園事務所主催の観察会の案内について微力ではあるが、会員一同懸命な努力をして積極的に行なっているしそれに、滝野、ニセコ、真駒内、恵庭、岩見沢と、単に札幌近郊の会員だけでなく、外縁的な拡大に繋がる手段を講じているものの、いまいち期待したほどの成果や反応が見られない。なぜだろうか。自然観察会の参加する機会を増やし、さらに下見でも本番でも会員の出来る範囲での参加を望んでいるのだが、これらより多くの会員参加方法について、会員の率直なご意見を聴きたい。

こんなことが解決されると、即魅力ある協議会として存在することにもなるのだろう。この10周年を節目として、会員の意見を縦糸にし、さらに徹底した分析を横糸とした組織づくりに意を注ぎたいものだ。

そんな観点から会報「エゾマツ」に、より一層の会員各位の声がよく聞こえてくるようにしたい。10周年の節目を記念して、この会報特集号や野幌森林公園でのセルフガイドブックを10周年記念事業実行委員会が中心となって鋭意作成中だが、この費用に関しては会員各位の拠金を主体に、協議会からの補助、寄付金とさらに、不足分について他の団体から求めることにしたが意にかなわず、現在は総べて自賄いがないで対応することになっているが、今一度拠金を忘れていた会員各位に呼びかけたい。あなたの手作りガイドブックであり、いづれでもその資金が活用されることにご理解を得たい。

現在、年度の主催・協力の自然観察会一覧に次ぎの挨拶文を付し、協議会の理解を願っている。

「北海道（窓口……北海道保健環境部環境室自然保護課保全係）が、自然保護普及啓蒙の一環として、北海道の豊かな自然、その自然の素晴らしさを多くの人びとに理解され、自然保護や自然環境の保全に役立つことを目的に、昭和61年（1986年）からボランティア・レンジャー（自然解説員）として、自然と人との橋渡し役を育成してきました。

北海道ボランティア・レンジャー協議会は、ボランティア・レンジャー育成研修会に参加した人たちで組織し、「会員の自然観察及び自然保護に関する意識の高揚を図り、自然解説等を通して自然保護思想の普及啓発に務め、関係機関・団体と協力のもとに将来にわたって北海道の自然環境の保全に寄与するとともに、会員相互の情報交換と親睦を深める」ことを目的に、昭和61年12月に結成されて以来今日に至っています。

現在会員数は約150名で主に自然観察会の案内役としてボランティア活動を野幌森林公園をフィールドに行なっていますが、その他地域的に、組織または個人で活躍しています。

今後一層の目的達成のために、各地で各関係機関・団体と連携しながら自然観察会を開催したり、各関係機関・団体が企画実施する自然観察会・研修会・調査事業等の協力、参加をさせて頂きます。北海道ボランティア・レンジャー協議会会長大友健」を、さらに「」を「①自然観察会の自然解説等を通じ、自然保護思想の普及啓発に務める。②会員の自然観察及び自然保護に関する意識の充実を図る。③会員相互の情報交換と親睦を図る。④共通の目的意識を持つ関係機関・団体との協力関係の強化を図る。」に変えて、より積極的な姿勢で、目的達成に歩を進めたい。

しかし、これもその成果をあげるためには、会員各位の協力が鍵になる。一人でも多くの会員が、自然観察会の本番・下見に参加しその実体験から、さらに、仲間を増やす外縁的拡大を図りたいものと思っている。

ある宗教家の言葉に「過去・未来でなく、今どう生きるかが大切だ」という表現があった。わたくしもこの協議会が、より発展するためには一人でも多くの仲間が、今に生きている証として、事業に参画することが、協議会の将来の発展に繋がるものであり、協議会が各位の手で、より充実した内容になることを念願して、広報部長からの依頼に応えたい。

最後に、どんなかたちでもボランティア・レンジャー育成研修会の目的が達成されるボランティア活動をするために、まず健康第1であり、会員各位のご健康を心から願い、この文の結びとしたい。

(1996.9.20. 記)



結成10周年に想う

北海道ボランティア・レンジャー協議会が結成されて、今年で10年になります。この10年の歩みを年譜に整理していると、結成当時の組織や活動のあり方等、基礎作りの苦勞を知ることができます。と同時に、活動の足跡の中から、本会が今後考えていかなばならぬ手がかりも見つけだすこともできます。

先日、結成当時ご苦勞された元役員の方（現在退会されています）からお話を伺う機会がありました。会の現状のプラス面、マイナス面の指摘は耳を傾ける点が多くありました。

現代は、多様化の時代の中での変化への対応が求められていると言われていきます。私たちの活動も、多様な発想の中で考えて行く必要はないでしょうか。

例えば、自然観察会も環境教育のかかわりの中で計画したり、観察会ルート清掃整備、植樹活動等々、さなざまなニーズに対応していく柔軟な計画や実施を考える必要はないでしょうか。

会の活動とは別に、各地において独自に活動を進めている方々の情報や実践も聞こえてきます。この地道な活動は、ボランティア・レンジャーの原点を知る思いもします。

いずれにせよ、私たちの会に一般の人たちが、何を期待しているのか、そして、私たちはなにを基本とするのか、10年の節目にあたって改めて考える必要がありそうです。

(広報部 田村 記)

6月以降の活動

- 6月30日(日) ・ニセコの自然 観察会 (雨天のため中止)
- 7月14日(日) ・恵庭の自然 観察会 (下見 7月7日)
- 7月18日(木) ・森林公園事務所主催 7月の森の観察会 (協力参加)
- 8月 1日(木) ・森林公園事務所主催 8月の森の観察会 (協力参加)
- 8月 9日(金) ・全国高校総合文化祭 自然観察会 協力
- 8月11日(日) ・真駒内の自然 観察会 (下見 8月4日)
- 8月25日(金) ・厚別区親子自然観察会 協力
- 9月 1日(日) ・野幌自然観察の集い (下見 8月25日)
- 9月15日(日) ・弱視研 自然観察会 協力
- 9月18日(金) ・役員会 於：かでの27
- 9月29日(日) ・利根別の自然 観察会 (下見 9月22日)
- 10月12日(土) ・厚別区親子自然観察会 協力
- 10月20日(日) ・秋の森の観察会 (下見 10月13日)
- 10月20日(日) ・会報誌「エゾマツ」38号発行

各地での活躍

会員の皆さんの中には、各地でボランティア・レンジャーとして活躍されている方が沢山いられます。今回は、その中から、ニセコの池田郁郎氏、札幌の池崎直治氏、藤田正次氏、猪師勉氏の4氏を紹介します。

ニセコに住む池田郁郎氏はペンション経営の傍ら自然保護監視員の仕事をされています。「ニセコの自然観察会」では前日の交流会や宿泊場所として、当日は案内人としてお世話になっています。ニセコ町「広報ニセコ」7月号に次の文が掲載されています。

夏のニセコは魅力いっぱい

スキーで有名なニセコですが、夏も魅力がいっぱいです。そこで、自然保護監視員の一人池田郁郎三(ペンション村駐在区)に山の楽しみ方を教えてもらいました。

「そんなに山に入らなくても、びっくりするような発見ができます。たとえば、このアンヌプリの森林公園だけでも、200種以上の木や草がみられますし、スマイレヤ野苺の群落もあるんですよ」

最近の山事情については「登山道の横でもコガネギクなどの花が見られるようになりました。登山道を外れたり、休むときには草花をつぶさないように」「山菜取りのマナーは依然、非常に悪いです。自然を楽しむには、最低限守らなければならないことがあるはず。ごみは持ち帰るように。それと、キツネが多いので、山菜や木の実などはよく洗ってから食べた方がいいですね」「車やキャンプ道具がなくても、気軽に楽しめる自然観察会などでニセコの夏の魅力を発見してみてください。

お手伝いしますよ」とアドバイスしてくれました。

(広報ニセコの情報は、会員小泉郁夫氏からの提供です)

池崎直治氏は、岩見沢で開催された「世界の木のおもちゃ展」に関わったことを知らせていただきました。

去る7月6日～7日、岩見沢道有林管理センターが中心になり、同センターを会場に「世界の木おもちゃ展」をメインに木のフェスティバルを開催しました。

ドイツ等世界各国からの珍しいおもちゃ類約400点余りを展示するとともに、その他のイベントも実施。これは、道有林創設90周年とセンター庁舎落成を記念して行ったもので、来場者は2日間で4千名余りと大盛況でした。私は、このような楽しいイベントの仕事もしています。

藤田正次氏は、蝶を写真に収めています。オリンピックの年に合わせ4年毎に写真展を開いています。毎回好評で、今年の写真展について、北海道新聞（8月15日付）に次の記事が掲載されていました。

一瞬の美“撮らえて” 32点のチョウ展示

札幌近郊や大雪山系などに生息するチョウを収めた写真展「野蝶（やちょう）の詩（うた）」が札幌市中央区大通東1、北電エレナードギャラリーで、開かれている。

同市西区のカメラマン藤田正次三(38)が撮った32点を展示している。ラベンダー畑を飛ぶモンシロチョウ、フキノトウに止まるヒメギフチョウ、天然記念物のヒメチャマダラセセリ、大きな羽のカラスアゲハなど、ふだん見過ごしているチョウの美しさを楽しめる。[チョウは小さいうえに、動きの素早いものが多く写真を撮るのが大変でした]と藤田さん。

日帰りで登山するなどの苦勞と、チョウへの愛着が作品に込められている。

猪師 勉氏は、自ら「自然体験塾」を主宰され、子どもを対象にした観察会、登山を兼ねた観察会など、精力的に活動しています。活動状況について、次頁の一文を寄せていただきました。

自然体験塾

札幌市 猪師 勉

私はボランティア・レンジャーの、猪師と申します。過去10年間、日本野鳥の会札幌市部に所属して世話人をしていました。

その後、道ボラレンに籍を置きながら皆様のご指導をいただいています。また、私は独自で「自然体験塾」をいまから5年前に設立し、現在に至っています。お陰様で昨年の年間参加者総数も916人で、一人で塾の活動を続けていくのは、もはや限界を感じさせられる今日この頃です。

活動内容も、野鳥観察・植物観察・山菜・キノコ・薬用植物観察・夏山登山・冬山登山・小学生の「親離なれ・子離なれ」サマーキャンプ、等々自然に関係するものすべてを対象にしています。

私は、このすがらしい北海道の自然を多くの人たちに、まず見てもらい自然大好き人間が、もっともっと増えてくれるように、そのための道案内人にお役にたてればと願っております。。このことが尊い自然を次の世代に無傷で残してやれる原動力になれるものと確信しています。

私たちボラレンにとって自然観察会に参加された人たちをより楽しい観察会であったと感じてもらえるか否かは、世話人としての腕の見せどころであると思います。そこで、世話人は、とかく先生気取りになりがちになるものですが、観察会に参加された方々はそのことをあまり好みません。

自然を大切に、みんなで自然を保護しなければと口にする世話人が多いと思います。しかし自然保護精神は参加者一人ひとりが無理なく心の奥から湧き出るものでなければ本物とは言えません。

ここで申し上げたいことは、観察会に参加してくれる人は多方面から、色々な

人がきます。時には大変気ままな人もいます。世話人は常に特定の人をつくらず自信をもって人に接することが、ボランティア・レンジャーとしての大事なしごとのひとつでもあるのではないのでしょうか。

今後も皆さんのご指導を頂きながら、良い自然案内人でありたいと考えます。

最後になりましたが、ボランティア・レンジャー協議会の10周年を機に益々のご発展を望んでやみません。



新 会 員 紹 介

7月19日から21日の3日間、月形町皆楽園内はな工房で、平成8年度ボランティア・レンジャー育成研修会がおこなわれました。

育成研修会の修了者40名の内、本会の趣旨に賛同され入会された方は下記の21名です。私たちの仲間として、観察会や研修会での活躍を期待します。

札幌市	鹿野 隆	佐々木義治	佐藤雅之輔	山崎 富司
	小泉 三雄			
登別市	笠谷真理子	木村 孝	澤田 時人	水野 直美
	白鳥 克美			
旭川市	平川 弘志	渡邊 儀明		
京極町	角田 洋一	江別市	阿部 徹	
千歳市	土屋 浩二	当別町	目黒 敏弘	
美唄市	菊池 亨	下川町	宮田 修	
新得町	加藤 幸夫	音更町	佐々木由美子	
清水町	下関 誠			

『一冊の本』と『自然』への想いなど

札幌市 小山 賢一郎

“はじめに”

『一冊の本』とは、ヘルマン・ヘッセの書いた「庭仕事の愉しみ」（注1）のことですが、今年の6月に発売されて以来3ヶ月足らずの間に中高年齢層を中心に、すでに14万部が売れ、ベストセラーになっているとのことです。（注2）

私は高校生の頃から外国文学では、とくにヘッセの作品を愛読しています。それにはいくつかの理由がありますが、標題の『自然』の描写に大きな魅力を感じていることがその一つでもあります。この本の概要にふれながら、標題について想うことのいくつかを記してみます。

“「庭仕事の愉しみ」の分析—その数量化—”

まず作品に取り上げられている自然を植物（果実・野菜・その他の樹木・草花にわけ）昆虫・鳥・その他の動物にわけ（注3）その状況を数字で表してみました。

この本の「自然」の数量化の表

果実	野菜	樹木・草花	昆虫	鳥	その他の動物
10	13	93(その中の56)	11	10	14

- (注) ・昆虫、鳥、その他の動物でどこに含めてよいか不詳のもの2・3は除いた。
・樹木、草花(56)は北海道でごく普通にみられると判断されるものを表す。なお、草花ではとくに園芸種がほとんどである。

その結果は植物が圧倒的に多く、かれの描いた水彩画には植物が多いので共通する現象です。また、かれの住い（何度か転居している）がスイスの豊かな田園にあったことから、北海道とは気候的にも近いのか、共通の植物が多いことがわかります。

なお、家庭の庭を取りあげて『自然』とすることには異論があるかも知れませんがこの本では『自然』という言葉をごく普通に使っているのでこだわりませんでした。

“『自然』への想いなど”

この本の反響は新聞や雑誌に掲載されました。それを紹介してみます。『…自然破

壊を繰り返す以前の日本的な自然観とあい通じるものがある』(注4)とか、『自然と同化するというヘッセの東洋的な自然観は無理なく受け入れられる…』(注5)などです。しかし、この本を読むと、私はもっと本質的なこと、すなわち、かれの生涯が「ヨーロッパの近・現代である」ということにまず留意することではないかと思えます。例えば、「木」という小タイトルの中の文に、『木と話をし、木に傾聴することのできる人は、真理を体得する…』、『木は…生きることの根本法則を説く』また、『ある木は語る。…私は神が私の中に存在することを信じる…』(・印の言葉に留意「庭仕事の愉しみ」50頁 1918年の作品による)

さらに、「一区画の土地に責任をもつ」という小タイトルの中の文に、『土地を耕作する者の生活、勤勉と苦勞にみちてはいるけれど、性急さがなく、本来憂慮というもののない生活なのだ。なぜなら、その生活の根底をなすものは、信仰であり、大地、水、空気、四季の神性にたいする、植物と動物の諸力に対する信頼だからである…』(「同」:126頁 1939年の作品による)。こうした文の・印の部分は、明らかにギリシャ以来の教養(哲学思想)とキリスト教との伝統的な遺産にかれの思想は裏打ちされていると考えます。

一方、「庭仕事」に没頭する一見のんびりした文学者の生活をあらわすような『一枚の写真(ヘッセ62歳のときのもの)が、撮影から20年後の1958年になって、ドイツのニュース週間誌「シュピーゲル」の表紙に使われ、ヘッセを時代の諸要求から逃避するような取るに足らない反動的な作家だ、と決めつける悪意に満ちたものだったという』、ヒトラー統治当時、祖国ドイツを離れ、スイスで作家活動を続けていたヘッセのことを取り上げた記事に注目しました。(注6)

それと同時に『…専門家のあいだでは「内向性」と呼ばれていて自分の生活の義務から逃避し、自分の夢に陶醉し、遊んで時を浪費するどんな大人にもまじめに相手にされない意志薄弱者の行為とされている』(「庭でのひととき」:長文の叙事詩の中の一節 151頁、1935年の作品による)とのかれの自己省察と判断できる文があります。

さらに、『伸び過ぎて硬くなったレタスやキュウリの蔓や葉、そのあいだにはよく小さなカードをはさんだ棒きれもまじっているそれは苗床に希望をもって種が蒔かれ

たしるしだがとうに要らなくなり、時期おくれになった。古代人や聖書の知恵が今日時代遅れになり多くの者に足で踏みつけられこの塵芥の山のように軽蔑されているのと同じように…』という文にも注目しました。（「同」：152頁、1935年の作品による）これは、前述の『…私は神が私の中に存在する…』・『…生活の根底をなすものは、信仰であり…』などとは正反対（ぎゃく）を意味する文です。ここに、いつわらざるヘッセ自身の思想の特質（実はあとでもふれますが、今日の世論一般の認識とも通じる特質）を読み取るここができる私は考えるのです。すなわちかれは、まぎれもなく西洋思想の体现者であると同時に、この本の他の記述（「それをさらに引用することは長くなるので、ここでは省略します」）の中に日本的かつ東洋的な『自然観』を読み取ることができます。もう一步すすめて考察するなら、ヘッセの『自然観』とは、西洋思想と東洋思想との共存であるということができるとはなからうかということ。ただし、つぎの記述においてヘッセと私とは、その見解を異にします。すなわち、かれの指摘した、『…聖書の知恵が今日時代遅れになり…』の箇所です。（このことは、『自然』への想いや『自然観』と関わりがあると思われまので記します。）

『キリスト教が現代の人々の精神的な求めに何等の回答を持ち得ない』というような意味のことは、よく聴くことばです。しかし『聖書の一字一句は神のことばとして不変の真理』というのが、すくなくとも福音主義（聖書主義）のキリスト教の正統な解釈（というより信仰というべきでしょう）です。そのことは、仏典に依拠する仏教においても同じことであろうと私は考えます。実はそんなことは関心のある人のこだわりのように、一般には思われているところに大きな誤解とさげがたい誤りが潜んでいるように思います。

かかる観点を発現にして、今日のみじかな『自然』への想いから考察すると、『生命の起源とその発展（展開）を、あたかも『遺伝子の解明』ですべて説明しつくせる（すなわち、『科学論のみ』で…）かのごとき学者の多いこと。要するに、『科学論のみ』で『自然』を説明しつくせると考えたり、さらには、『遺伝子の研究の発展』によって『文化現象』をも説明できると考える科学者の考え。（『科学万能』に依拠する人間（中心）主義です。これを、『自然』考察の『かかし論』または、「逆立ち

論』と私は呼びます。) それが『自然』を地道に探究している私たちの心と知性にいつのまにか潜んでいるといえましょう。その背後には、学校教育(わけても理科教育)がかかわっているといわざるを得ません。

『この世には科学や知性だけでは解釈できないものがあることを、私たちの祖先は知っていました…』、《『東京の人、皆疲れてみえた』 先住アメリカ人、チカソー族の作家 リンダ・ホーガンさん (注7)》

『…一種の生き物が森を支配することのないように神の定めた調和の世界だ…』

(『森の世界』 詩集どろ亀さんのなかの記事) (注8)

この二つの文は、『科学論のみ』ないし『科学万能』の『自然観』への、明らかな、かつ的確な回答です。それと同時に、リンダ・ホーガンさんの『祖先は知っていました…』や高橋延清氏の『神』という言葉を聴くと、『科学論のみ』ないし『科学万能』の『自然観』を支持する人たちは、しばしばそれを『神秘的』とか『神秘主義』と解釈します。そこで、私が、「大きな誤解とさげがたい誤り」と先述したのはそのためです。

“おわりに”

みじかな『自然』への想いと書きましたが、『自然観察』のボランティアレンジャー活動は、長々と書いたような、理屈っぽいことがらとは一見縁が遠く、もっと実践的かつ実地的であると思われがちです。しかし、現実はどうなのでしょう。北海道の環境基本条例の骨子に『自然とともに生きてきたアイヌ民族や先人たちの知恵や創造に学ぶと盛り込まれ…』(注9)とあります。私たちの10年あまりにおよぶ活動において、アイヌの方々の参加を得たり、また、講師に招いて、その『自然観』を傾聴することがあったでしょうか。私たちは、活動の実績と継承を考える前に、改めて『自然』への想いを確認し(それは指摘しなくとも“ボラレン”の会員はお互いに承知していることがらではありましようが…)

なお、繰り返しますが、アイヌの方々の北海道における『先住者としての存在』とその『自然観』や『伝統文化』に学びながら(注10)、私たちの“ボラレン活動”の未来構想へと発展させていくことが期待されます。

教訓といえる言葉をつぎに記して、締括りとします。(先述の文に深くかかわって

います。)

『人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人は一体何を差し出せばよいでしょう』

(聖書)

参 考 資 料

- (注1) V・ミヒェル編 岡田朝雄訳 草思社
- (注2) 週間朝日 9月20日発行 148頁
- (注3) この分けかたは、この本を読んで便宜的におこなった。
- (注4) 宮迫千鶴(画家) 朝日新聞 9月1日付 書評欄
- (注5) 岡田朝雄(東洋大学教授) 週間朝日 9月20日発行 150頁
- (注6) 週間朝日 9月20日発行 148頁
- (注7) 朝日新聞 9月12日(夕刊) コラム
- (注8) 高橋延清(東京大学名誉教授) 詩集どろ亀さん 54頁
- (注9) 朝日新聞 8月13日の記事
- (注10) 森の心 北海道ボランティアレンジャー山川草木を育てる集い
結成五周年記念誌 筆者記載文 72頁

— 共に得た感動から —

弱盲研究会主催「自然観察会」9月15日

札幌市 小泉三雄

すんだ空気と降りそそぐ太陽、豊かな水と肥沃な大地、生き物のすべてが、その恵みによって育まれています。

私たちの住む北海道には、日本でも誇れる素晴らしい自然があります。170万都市にある野幌森林公園も、自然の一つです。その公園で9月15日弱盲の方の自然観察会行われ、レンジャー協議会で案内をしました。当日は朝方まで秋雨で空模様を心配しながら出かけたが、公園に着いた頃にはまずまずの天気。

公園総合案内所前でグループ編成、私の班に付添い人として札幌社会福祉専門学校の学生、弱盲の方は東京の青年であった。

当日の観察会は、とくに触覚・味覚・嗅覚を主体とし、遠くのものも良く分かるように具体的に説明しようと打合せてあった。

百年記念塔前で噴水の音を聞きながら、頬をなでるさわやかな風「空気がちがうね」………解説よりも参加者の第一声、初めて立った地で、自分自身の肌で感じてくれた野幌との出会い、体験できた喜び、私も大変うれしかった。歩きながらモンタナマツの葉の感触、2本1束になって枝に着くありさま、私の差し出したハイマツ5本1束と比べ不思議そうな顔、ハイマツの葉を大事にポケットに入れた、東京まで運ばれて行ったのかな。ゴヨウマツの実を配った、「これ食べられるのですか」「えっ」と、おどろき口に入れる、あとまで残る松ヤニの味………少し歩き今度はニガキの味覚「今日はいろいろな物食べられるね」と云っておそろおそろ口にする、「これは苦い」私の母親がキハダの内皮を薬用に使っていたことを話した。自然と人間の関わりを少しでも感じてくれればとの願いがあった。

ときどきは立ち止まる、植物の茎（冬芽）・葉・花は、今日は雨上がりどんな状態だろうか？ クマイザサの感触のとき、ふと見るとカタツムリがいた、手にのせて腹足で移動する様子を観察しながら、殻の模様や右巻か左巻きかが観察のポイントであ

ることを説明したら、「どうやってえさを食べるのか」と質問された、私の両手を使って、がく（顎）ぼんと、ヤスリのような歯舌で葉などを削り取るようにして食べることを分かりやすく解説し、オス・メスの区別のないこと、成長するにつれて殻のうず巻の数が増してくるし、うず巻きの数で大人であることが分かる事まで、分かったふりしてしゃべってしまった。雨上がりで今日はカタツムリが居るだろうと心の準備はしてあった。専門的かも知れないが、楽しみの幅を広げ見方を深めてほしかった、参加者の気持ちを察しながら、発見や感動を引き出すお手伝いが出来たような気がしてならない。

アサダの葉に触れる、私も何度も触れた、指先から伝わってくる暖かい感じ、もちろん学生さんにも味わってもらった。

森林内へ深く入った所で「空気がちがう」と云う、森の中は静か、木々の緑は柔らか、空気がきれいその通りに感じてくれたのです。すかさず「フィトンチッド」とは「生物活性物質」の総称、そして葉は光を受け水と二酸化炭素を原料にしてでんぶんと酸素を作り出すことを「葉は工場」にたとえて話した。こんな事は教科書で教わるし、ごく当たり前を感じるが、現地の森林で体験し、その時新鮮で、強い印象の時こそ、本物の知識や態度として身につくもではないでしょうか。

弱盲の方は、何時でも使用できるようにルーベまたは単眼鏡を携帯しているとのこと、それを利用してアケボノソウ（~~曙葉~~）（リンドウ科）の花冠を食い入るように見つめる、白っぽいクリーム色（~~朝霧方の空~~）、先の方に黒紫色の斑点（~~星に見立てて~~）、中央部に薄緑色の円い腺体二つ、主脈も目立ち、皆さんでしばし感動、私もカメラに収めた。やはり主役は自然であった。

観察会が終わって別れる時、弱盲研究会代表の工藤さん「また、参加したい」と笑顔で握手、すかり野幌森林公園が気に入ったようでした。

自然解説の知識や経験のない私ですが、自然には今日もいつもと違う顔があつたし、何時も何か新しい発見がある、だから私は自分の楽しみ喜びがあるし、自然から得た驚きや感動を参加者と共有できると思ってる、それが、私の観察会への参加意欲です。

終わってみて、今回もまた（一般の方の観察会もそうですが）事務局の佐々木幸夫さんの事前の連絡企画、準備、下見、当日のミーティング、実施、反省に支えられた観察会でした、いつも頭がさがります。

野幌森林公園の野鳥

～身近かに観察できる森林の野鳥を中心に～

札幌市 大槻 日出男

はじめに

地球上には約8600種の野鳥が棲息し、日本では555種が1986年現在記録され、そのうち、日本に棲息または定期的に飛来する野鳥は350種である。北海道では約300種を確認されているが、野幌森林公園では森林性の野鳥を中心に、33科120種を観察することができる。このような数字の記載は大切なことですが、野鳥が私たちに与えてくれる感動を伝えることはできません。

森林が雪に埋もれる1月、沢すじの日溜まりで、シジュウカラ・ハシブトガラ アカゲラ・ヤマゲラ・コゲラ等の混群に囲まれ、目の前のトドマツの枝先きで採餌しているキクイタダキを観察、光陽につつまれた5月、空の青を背景にしたキジバトのディスプレイ・フライト、森の紅葉もさびしくなる10月下旬 低気圧通過後の森林公園の東端で、石狩低地帯上空をゆっくりと南下するコハクチョウの大群、この一つひとつの野鳥の振舞が自然の豊かさを私たちに伝えてくれます。

野幌森林公園を中心に、楽しみながら記録したフィールドノートが少し溜まりましたので整理してみました。野鳥の観察データとしては不十分ですので、森林公園事務所の資料や野鳥の会のデータを参考に検討をくわえました。自然観察の中で「森林や水辺の野鳥」を観察する楽しさを伝えることができれば幸いです。

1. フィールド・ノートを整理するにあたって

野鳥の観察は、季節や天候、地形や樹種により観察できる野鳥の種類も出現率も大きく変化します。例えば、オオルリー5月の沢すじ・大きな樹木の枝でさえずります。キクイタダキ留鳥で通年観察できますが針葉樹の先端部の枝先や葉の間にはいりこむように採餌しています。当然のことながら、淡水ガモ類は森林公園内の池で観察します。したがって野鳥観察の記録も観察の日時・コースにより記録できる野鳥の種類は変動しますので、不十分なことは承知の上で、次の方法・観点でフィールドノートを整理しました。

(1) 記録した野鳥の整理

個人が観察し記録したフィールドノートの整理です。一度の観察記録しかない等、確認が不十分なものは記載しません。アカショウビンやエゾライチョウなどは残念ながら観察していないのです。

整理にあたり困った問題があります。ハシブトガラとコガラの識別のことです。両者とも、北海道に棲息していることになっていますが、フィールドのスコープによる観察では識別できません。「さえずり」により差違を確認できますが森林公園での「さえずり」は、ハシブトガラのみでした。したがって記載はすべてハシブトガラとします。

(2) 観察コース

フィールドノートに野鳥を記録しながら歩いた観察コースは、森林公園の次のコースです。淡水ガモ類とカワセミ以外は、コースによる違いはありません。

- ・瑞穂連絡線－瑞穂の池－開拓の村東路－セキレイ橋－開拓記念館
- ・大沢口－エゾスズリハコース－四季美コース－大沢コース－大沢口
- ・椴山口－登満別線－登満別園地－中央線－椴山口

(3) 季節の記録

野鳥の種類は季節変化が大きいので、次の時季に三区別して記載しました。なお深い緑に囲まれた夏季は、淡水ガモ類のエクリプス羽（雄が雌と同じような地味な色になる）や、幼鳥が観察されますが、野鳥の観察がやりにくく、観察記録も不十分ですもで省略しました。

- ・雪に埋もれた森林の野鳥（1月～2月）
- ・若葉につつまれた森林の野鳥（4月下旬～6月上旬）
- ・紅葉に映える森林の野鳥（9月下旬～6月下旬）

(4) 観察できる野鳥の出現率について

自然観察会では「どんな野鳥が観察できるか？」などに見当をつけることは大切なことです。しかし羽根のある野鳥のことです。「この季節の午前中、天候に恵まれていれば……」ということで、次の5段階に出現の目安をつけてみました。

記入した出現率の数値は（10回観察コースを歩けば8~10回は観察できる）=9/10
とじています。

いつも観察できる	~9/10~
良く観察できる	~7/10~
普通（2回に1回は観察できる）	~5/10~
ときどき観察できる	~3/10~
滅多に観察できない	~1/10~

クマガラ・フクロウ・ワシタカ類
については、出現率はすべて~1/10~
にしてあります。

（ただし、トビは例外）

2. 雪に埋もれた森林の野鳥（1月~2月）

深い雪に埋もれた森林は、樹木により風が弱められ、多くの木々が葉を落として見通しがよくなっています。歩くスキーと暖かいコーヒーがあれば、野鳥観察には適した時季です。

カラ類やキツツキ類など、留鳥として通年観察できる野鳥をしっかりと確認し、ツグミやレンジャク類などの冬鳥観察のシーズンです。

また、このシーズンに特筆すべきことは、カラ・キツツキ類等が混群をつくり採餌しているのを観察できることです。日溜まりで数十羽・10種をこえる野鳥に囲まれてコーヒーを飲む。ゆったりとしあわせになります。

和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシブトガラ	~9/10~	ヒガラ	~7/10~	シメ	~3/10~
シジュウカラ	'	シマエナガ	'	アトリ	'
ゴジュウカラ	'	オオアカゲラ	'	マヒワ	'
アカゲラ	'	ヤマゲラ	'	ヒレンジャク	'
コゲラ	'	ミヤマカケス	'	ムクドリ	'
ヒヨドリ	'	ハシブトガラス	'	クマガラ	~1/10~
トビ	'	ハシボソガラス	~5/10~	ノリス	'
ウソ	'	スズメ	'	オオタカ	'
ツグミ	'	キバシリ	'	ハイタカ	'
ヤマガラ	~7/10~	キクイタダキ	'	フクロウ	'

（14科 30種）

3. 若葉につつまれた森林の野鳥（4月下旬～6月上旬）

夏鳥が次々に飛来し、冬鳥が少しずつ北に向かって旅立つ時季です。新緑の森林では、野鳥たちが「さえずり」ディスプレイそして営巣と、めまぐるしく活動するシーズンです。さえずりで野鳥を確認し双眼鏡をむけると、その視野に期待どおり野鳥がいる。たのしい自然との遊びです。

なお、3月下旬から5月は、冬鳥と夏鳥の出入りが多く、一週間前には一羽も確認できなかったキビタキやセンダイムシクイが、森にあふれるように「さえずり」を聞かせてくれることがあります。

和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシブトガラ	~9/10~	ニューナイスズメ	~9/10~	ホオアカ	~5/10~
シジュウカラ	・	ウグイス	・	ツグミ	~3/10~
ヒガラ	・	ヤブサメ	・	アカハラ	・
ヤマガラ	・	センダイムシクイ	・	ウソ	・
ゴジュウカラ	・	キビタキ	・	マヒワ	・
シマエナガ	・	アオサギ	・	オオジシギ	・
アカゲラ	・	ヤマゲラ	~7/10~	ツツドリ	・
コゲラ	・	オオアカゲラ	・	カッコウ	・
ヒヨドリ	・	ムクドリ	・	ルリビタキ	・
スズメ	・	シメ	・	ミソサザイ	・
トビ	・	イカル	・	ベニマシコ	~1/10~
ハシブトガラス	・	クロツグミ	・	コルリ	・
ハシボソガラス	・	モズ	・	コムクドリ	・
ミヤマカケス	・	オオルリ	・	トラツグミ	・
キジバト	・	メジロ	・	キンクロハジロ	・
ヒバリ	・	カイツブリ	・	カワセミ	・
ハクセキレイ	・	マガモ	~5/10~	クマゲラ	・
カワラヒワ	・	オシドリ	・	ノリス	・
ホオジロ	・	キクイタダキ	・	ハイタカ	・
アオジ	・	キバシリ	・	オオタカ	・

(25科 60種)

4. 紅葉に映える森林の野鳥（9月下旬～10月下旬）

コシアブラの葉が白く抜けて、ハウチワカエデのみごとな紅葉がみられるこの時季、夏鳥が次々に森を去り、冬鳥が飛来してきます。またカシラダカのようにシベリア等で繁殖し、本州以南へ渡る野鳥も観察できるときです。

この時季には、樹木の実を採餌する野鳥を観察できます。ホオノキの実を割ろうとしているゴジュウカラ（Nuthatch）やアサダの実をたべているカワラヒワなどゆっくりみることができます。また10月下旬には、森林公園やその東側に広がる石狩低地帯上空を南下する鳥の渡りを観察することができるのです。

和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシブトガラ	~9/10~	ヤマゲラ	~5/10~	ルリビタキ	~3/10~
シジュウカラ	・	オオアカゲラ	・	ウグイス	・
ヤマガラ	・	キバシリ	・	メジロ	・
ゴジュウカラ	・	キジバト	・	アカハラ	・
アカゲラ	・	ムクドリ	・	マガモ	・
コゲラ	・	スズメ	・	コガモ	・
ヒヨドリ	・	ツグミ	・	ホオジロ	~1/10~
トビ	・	カワラヒワ	・	ベニマシコ	・
ミヤマカケス	~7/10~	イカル	・	アトリ	・
ハシブトガラス	・	シメ	・	ノリス	・
ハシボソガラス	・	アオジ	・	ハイタカ	・
ヒガラ	~5/10~	カシラダカ	・	フクロウ	・
シマエナガ	・	ウソ	~3/10~		
キクイイタダキ	・	ミソサザイ	・		

（18科 40種）

5. 小鳥類の「さえずり」について

自然観察会では、動きの早い野鳥をグループ全員に観察してもらうことは難しいことですが、野鳥の「さえずり」は全員で確認することのできる自然からのメッセージです。観察会の途中で小鳥のさえずりに耳を澄ますと「キョロイ・キ

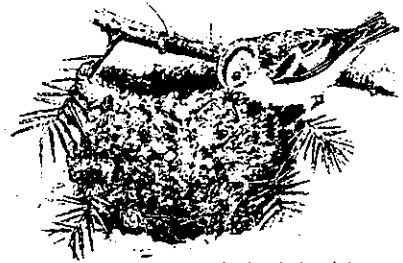
ヨロイ……」の変化をつけて長くさえずるクロツグミを初夏の森では確認できます。このとき観察者一人ひとりの感覚が森林に広がり、樹木や野の花と一体になって、豊かな自然を五感で体験できると思うのです。

初夏の森林でのにぎやかな「さえずり」とともに、通年聞くことができるキツツキ類やゴジュウカラの採餌の音や、冬の森での「ぐぜり」や地鳴き等も、耳での観察としては興味あるものです。

おわりに

野幌森林公園での野鳥との個人的な出会いをまとめてみました。林縁の草地等で観察できる野鳥をふくめて、雪の森林で14科30種、若葉の森で25科60種、紅葉の森では18科40種を記載しました。野幌森林公園に棲息・定期的に飛来してくる野鳥の約70%にあたります。残りの30%の多くは数年に一度確認されるものです。

1986年現在、50回以上の探鳥会を実施している北海道野鳥愛護会の「私たちの探鳥会（探鳥会17年の記録）によれば34科98種が記録されています。一度の探鳥会で数十人が確認し、17年継続して確認された資料です。野幌森林公園で確認できる野鳥が変化していく様子が読み取れる記録ですので是非参考にしてください。



キクイタダキ

参 考

- | | | |
|-------------------|--------------|----------|
| 日本の野鳥 | 高野 伸二 編 | 山と溪谷社 |
| フィールドガイド・日本の野鳥 | 高野 伸二 著 | 日本野鳥の会 |
| 北海道の野鳥 | 藤巻 裕蔵 監修 | 北海道新聞社 |
| 北海道の自然(1) 野鳥 | 井上 元則 著 | 北海道新聞社 |
| 私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録 | 北海道野鳥愛護会 | |
| 森へのいざない—野幌森林公園 | 北海道野幌森林公園事務所 | |
| バードウォッチング—鳥たちの四季 | ピーター・バレット画 | TBSブリタニカ |

北海道ボランティア・レンジャー協議会の発展を願って

～アンケート実施とその結果～

1. はじめに

近年、自然環境についての関心が序々にではありますが高まりつつあります。それは、過去に行われてきた自然破壊の反省と共に、人間生活には豊かな自然なしには成立し得ないという考えが受け入れられてきたことにあります。

私たちの会、ボランティア・レンジャー協議会は「自然観察会」等を通して自然保護の啓発に努めてきたという自負があります。しかし、10年という歩みがすべて評価できるとは考えられません。そこで、10年を節目に活動の反省点を明らかにし、さらなる発展の手掛かりを得るため会員の皆さんにアンケートをお願いしました。

本来ですと、全会員にお願いするところですが、調査費用（送返信料）の関係で、50名の無作為抽出（役員は除く）で行いました。また、設問については回答項目の選択方式はとらず、すこしでも会員の皆さんの声を聞くため記述回答方式をとりました。記述回答については、同記述または同趣旨の内容を整理してあります。

回収数については、18名とアンケート調査としては物足りない面はありますが今後の活動に参考になったり役立つ意見が寄せられたものと考えます。

2. 質問項目とその回答（名）は回答者数

(1) ボランティア・レンジャー育成研修会には、どのようなお考えで受講されましたか。

- ・自然に対する知識を得るため。(2名)
- ・ボランティア・レンジャーに興味があったから。(3名)
- ・ボランティア・レンジャー協議会に入会したかった。(1名)
- ・観察会で活動するため。(3名)
- ・自分の仕事に役立つと思ったから。(2名)
- ・趣味を充実させるため。(2名)
- ・余暇を活用して役立てたい。(1名)

- ・特別理由はないが、何かに役立つと思った。(2名)
 - ・無回答 (2名)
- (2) 育成研修会で学ばれたことを、現在あなたはどのように活用されていますか。
- ・ボランティア・レンジャー協議会に入会して観察会に参加している。(3名)
 - ・特に研修会で学んだことを活用していない。(6名)
 - ・研修会での内容は期待はずれだった。(内容がなく一般的である)(4名)
 - ・活用する場がない。(受講者を登録して道の主催行事に動員してほしい)(1名)
 - ・無回答 (4名)
- (3) ボランティア・レンジャー協議会に入会された動機をお知らせください。
- ・ボランティア活動をしたかった。(2名)
 - ・第二の人生の生きがいがあった。(1名)
 - ・理由はないが、なんとはなく入会した。(3名)
 - ・趣味の仲間入りをしたいため。(1名)
 - ・育成研修受講者は入会するものだと思った。(2名)
 - ・無回答 (9名)
- (4) 入会后、会の活動に参加されていますか。
- ・参加している。(2名)
 - ・都合がつけば参加している。(2名)
 - ・興味のある観察会には参加している。(1名)
 - ・参加していない。(5名)
 - ・参加しようにも参加できない。(2名)
 - ・札幌中心の活動では無理。(1名)
 - ・無回答 (5名)
- (5) 会の活動に参加できない方の理由があればお聞かせください。
- ・地方に住む者にとっては、今の観察会の場所では無理。(2名)
 - ・マンネリの活動には興味がわかない。(3名)
 - ・観察会等の活動に参加できなくてもよいとおもう。(1名)
 - ・無回答 (12名)

(6) 会の運営についてご意見があればお聞かせください。

- ・役員の皆さん、ご苦労さまです。(3名)
- ・会の運営がよくわからない。(4名)
- ・特になし。(2名)
- ・無回答 (9名)

(7) 会のさらなる発展充実のための活動のありかた、会運営のありかたについてご意見をお聞かせください。

- ・地方に住む者の会の関わりを考えて欲しい。(自分が考える面もあるが) (2名)
- ・札幌中心の活動に不満がある。(1名)
- ・今までの観察会で満足している。(2名)
- ・観察会はマンネリである。(顔ぶれがいつも同じ) (1名)
- ・子どもを対象とした観察会を開いてはどうか。(1名)
- ・円山、手稲山(札幌)で観察会を開いてみては。(1名)
- ・嵐山(旭川)で観察会を開いてみてはどうか。(1名)
- ・研修会や講演会を開いてほしい。(1名)
- ・野鳥観察会をしてほしい。(2名)
- ・広報誌「エゾマツ」を2ヶ月ごとに発行(年6回)して欲しい。(1名)
- ・会費(年3千円)は高い。(1名)
- ・役員のご苦労に感謝している。(1名)
- ・特にない。(1名)
- ・無回答 (2名)

3. アンケート結果の考察

冒頭でふれましたが、今回の調査は50人の無作為抽出で行いましたが、多くの会員の声をくみあげるには全会員を対象にすべきだったとまず調査の方法を反省しています。しかし、各地の会員の皆様の声が十分ではないにしても聞くことができたことは、意義があったと考えます。回答の結果を5項目にまとめました。本会の今後の活動の資料となればと思います。

- ①育成研修会とボランティア・レンジャー協議会の関係については、相互の目的や相違点または協力関係を会員が理解するための資料等を広報活動を通して徹底する必要があります。
- ②本会に入会された会員の動機はさまざまですが、会を運営していく上で、できるだけ多くの思いや希望を取り入れる努力やPRをしていく必要があります。
- ③会員数は、札幌とその周辺に住んでいる方が多いことは事実ですが、全道的な組織です。各地の会員の参加が得られる場面設営の工夫と努力を考えるべきではないでしょうか。
- ④樹木や草花を中心とした観察会ばかりでなく、野鳥観察会等の変化も考えられるでしょう。また、さまざまなニーズに応えるため、子どもを対象とした観察会、登山観察会等の計画も今後考えていくべきではないでしょうか。
- ⑤広報誌「エゾマツ」の発行回数を増やすには、費用の面や会費とも関わります。しかし、情報社会と言われる昨今ですので、今後の検討課題でしょう。



会員の皆さんが持っているいろいろな希望、意見をどしどしお寄せください。会の発展のための建設的意見をお待ちします。

また、問い合わせがありましたら遠慮なくご連絡ください。

連絡先 〒003 札幌市白石区川下5条2丁目4-32

事務局長 佐々木幸夫

TEL・FAX 011-875-6602

北海道ボランティア・レンジャー協議会10年の歩み

西暦	年号	月 日	活 動 内 容
1986	昭和61	8. 29	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回 ボランティア・レンジャー育成研修会 千歳市支笏湖
		~31	
1987	昭和62	12. 6	<ul style="list-style-type: none"> ・「エゾマツ会」会則執行
		6. 1	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」1号 発行
		6. 7	<ul style="list-style-type: none"> ・野幌森林公園自然観察会（大沢口） 協力参加
		7. 15	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」2号 発行
		8. 21	<ul style="list-style-type: none"> ・エゾマツ会 総会 大沼国民宿舎 ユートピア大沼
		8. 21	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回 ボランティア・レンジャー育成研修会 七飯町林業研修センター
		~23	
1988	昭和63	10. 1	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」3号 発行
		10. 17	<ul style="list-style-type: none"> ・観察、講演会 13:30~ 北大植物園観察会 15:30~ 講演会
		10. 30	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大役員会
		1. 30	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」4号 発行
		2. 28	<ul style="list-style-type: none"> ・冬の森林観察会（野幌森林公園）
		4. 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ウトナイ湖春の渡り鳥観察会
		4. 24	<ul style="list-style-type: none"> ・春の森林観察会（野幌森林公園）
		5. 7	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」5号 発行
		5. 29	<ul style="list-style-type: none"> ・旭川北邦野草園観察会
		6. 30	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」6号 発行
		7. 9	<ul style="list-style-type: none"> ・雨竜沼湿原観察会 南暑寒荘宿泊
		~10	<ul style="list-style-type: none"> ・総会 標茶町字茅沼 標茶町青少年体育センター ボランティア・レンジャー「エゾマツ会」を 「北海道ボランティア・レンジャー協議会」に改称
		7. 29	
1989	平成元	7. 29	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回 ボランティア・レンジャー育成研修会 標茶町字茅沼 町営憩いの家「かや沼」
		~31	
		8. 1	<ul style="list-style-type: none"> ・会則の改正
		8. 6	<ul style="list-style-type: none"> ・西岡水源地ホタル観察会
		9. 11	<ul style="list-style-type: none"> ・岩見沢利根別キノコの観察会
		9. 25	<ul style="list-style-type: none"> ・手稲山登山観察会
		10. 5	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」7号 発行
		1. 31	<ul style="list-style-type: none"> ・会報誌「エゾマツ」8号 発行
		2. 26	<ul style="list-style-type: none"> ・冬の森林観察会（野幌森林公園）
		4. 23	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ拾い活動（野幌森林公園）
5. 21	<ul style="list-style-type: none"> ・春の森林観察会（野幌森林公園） 		

西暦	年号	月 日	活 動 内 容
1989	平成 元	6. 11	・環境週間観察会（野幌森林公園）
		5. 15	・会報誌「エゾマツ」9号 発行
		7. 8	・総会 札幌市定山溪
		7. 8	・会則一部改正
		7. 9	・観察研修会
		7. 19	・第4回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~21	東川町旭岳温泉
		7. 25	・会報誌「エゾマツ」10号 発行
		8. 20	・夏の森林観察会（野幌森林公園）
		10. 9	・会報誌「エゾマツ」11号 発行
1990	平成 2	2. 20	・会報誌「エゾマツ」12号 発行
		2. 25	・冬の森林観察会（野幌森林公園）
		5. 13	・春の森林観察会（野幌森林公園）
		5. 14	・会報誌「エゾマツ」13号 発行
		7. 20	・第5回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~22	様似町アポイ岳
		8. 3	・第6回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~5	野幌森林公園
		8. 7	・会報誌「エゾマツ」14号 発行
		8. 12	・夏の森林観察会（野幌森林公園）
1991	平成 3	8. 24	・第7回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~26	標茶町シラルトロ湖
		8. 25	・総会 札幌市定山溪 豊林荘
		~26	
		10. 14	・秋の森林観察会（野幌森林公園）
		11. 15	・会報誌「エゾマツ」15号 発行
		1.	・会報誌「エゾマツ」16号 発行
		3. 10	・冬の森林観察会（野幌森林公園）
		5. 12	・春の森林観察会（野幌森林公園）
		6. 9	・環境月間行事野幌自然観察会
1991	平成 3	8. 1	・第8回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~3	丸瀬布町いこいの家
		8. 4	・夏の森林観察会（野幌森林公園）
		8. 13	・会報誌「エゾマツ」17号 発行
		8. 24	・総会 札幌市職員会館
		9. 5	・第9回 フロンティア・レンジャー育成研修会
		~7	真狩村羊蹄青少年の森
		9. 8	・野幌自然観察の集い

西暦	年号	月 日	活 動 内 容		
1991	平成 3	10. 3	・第10回 ボランティア・レンジャー育成研修会 当別町道民の森		
		~ 5			
		10. 20	・秋の森林観察会（野幌森林公園）		
		10. 14	・会報誌「エゾマツ」18号 発行		
		11. 15	・ボランティア・レンジャー実践セミナー ウトナイ湖サンクチャリー		
		~ 16			
		12. 26	・会報誌「エゾマツ」19号 発行		
		1992	平成 4	1. 14	・会報誌「エゾマツ」20号 発行
				4. 9	・4月の月例観察会協力参加
				5. 10	・春の森林観察会（野幌森林公園）
4. 28	・会報誌「エゾマツ」21号 発行				
6. 7	・環境週間行事協力参加（野幌森林公園）				
6. 11	・第11回 ボランティア・レンジャー育成研修会 芽室町新嵐山荘				
~ 13					
7. 9	7月の月例観察会協力参加				
7. 20	・会報誌「エゾマツ」22号 発行				
7. 23	・第12回 ボランティア・レンジャー育成研修会 芦別市芦別温泉				
~ 25					
8. 8	・総会 札幌市かでの2・7 13:00~ 観察会（植物園） 15:00~ 総会 17:00~ 懇親会				
8. 8	・会則一部改正				
8. 9	・夏の森林観察会（野幌森林公園）				
8. 20	・第13回 ボランティア・レンジャー育成研修会 白老町ポロト湖				
~ 22					
9. 6	・野幌自然観察の集い参加				
9. 18	・ボランティア・レンジャー実践セミナー 黒松内町 歌才自然の家				
~ 19					
10. 10	・会報誌「エゾマツ」23号 発行				
10. 18	・秋の森林観察会（野幌森林公園）				
11. 12	・11月の月例観察会協力参加				
12. 10	・12月の月例観察会協力参加				
1993	平成 5	1. 10	・会報誌「エゾマツ」24号 発行		
		1. 14	・1月の月例観察会協力参加		
		2. 11	・2月の月例観察会協力参加		
		3. 7	・冬の森林観察会（野幌森林公園）		
		4. 10	・会報誌「エゾマツ」25号 発行		
		4. 8	・4月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）		
		5. 1	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口		

西暦	年号	月	日	活 動 内 容
1993	平成 5	5.	8	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口
		6.	6	・野幌自然観察会（開拓の沢コース） ボランティア 16名 一般 83名 参加
		7.	30	・会報誌「エゾマツ」26号 発行
		7.	31	・夏の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）
		8.	8	・夏の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		8.	6	・第14回 ボランティア・レンジャー育成研修会 厚沢部町山村開発センター
		8.	28	・ボランティア・レンジャー協議会定期総会 於：かでの2・7 13:00~研修会 15:10~総会 (事業年度切り替えのため、平成6年3月31日までを活動年度とする)
		8.	28	・会則一部改正
		8.	29	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園） 下見
		9.	5	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園）
		9.	21	・役員会 於：札幌市職員会館
		1994	平成 6	10.
10.	17			・秋の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口
11.	11			・11月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
11.	30			・会報誌「エゾマツ」27号 発行
12.	9			・12月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
1.	13			・1月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
2.	10			・2月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
2.	27			・ボランティア・レンジャー実践セミナー 北海道開拓記念館、森林公園 講師 斎藤新一郎氏
2.	28			・十勝ボラ・レンの会 発足
3.	12			・冬の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口
1994	平成 6	4.	10	・会報誌「エゾマツ」28号 発行
		4.	21	・4月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		4.	30	・平成6年度 定期総会 於：かでの2・7 13:00~ 観察会（道庁赤レンガ周辺） 15:00~ 総会 17:00~ 懇親会
		5.	11	・役員会 於：札幌市職員会館
		5.	15	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口
		6.	5	・野幌自然観察会（環境月間協力行事）
		6.	10	・会報誌「エゾマツ」29号 発行
		6.	26	・ニセコの自然観察会（神仙沼周辺）
		7.	24	・「恵庭の自然」観察会（恵庭公園）
		7.	29	・第15回 ボランティア・レンジャー育成研修会 美深町美深森林公園
				~31

西暦	年号	月 日	活 動 内 容		
1994	平成 6	8. 4	・8月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）		
		8. 24	・役員会 於：かでの2・7		
		9. 4	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園）		
		10. 20	・会報誌「エゾマツ」30号 発行 平成6年度 会員名簿発送		
		10. 23	・秋の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口		
		11. 10	・11月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）		
		11. 27	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園） 下見		
		12. 4	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園） 参加 17 名 65参加		
		1995	平成 7	1. 12	・1月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
				1. 13	・役員会 於：かでの2・7
				1. 20	・会報誌「エゾマツ」31号 発行
				2. 17	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
2. 18	・観察会「滝野の森を歩く」 滝野すずらん丘陵公園 下見				
2. 25	・観察会「滝野の森を歩く」 滝野すずらん丘陵公園 参加 13名 13名 参加				
3. 4	・冬の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口				
3. 5	・冬の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口				
3. 23	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7				
3. 27	・三役会議 於：かでの2・7				
3. 30	・会報誌「エゾマツ」32号 発行				
4. 3	・役員会 於：かでの2・7				
4. 15	・平成7年度 定期総会 於：かでの2・7 13:00~ 研修会 15:00~ 総会 17:00~ 懇親会				
4. 20	・4月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）				
5. 12	・役員会 於：かでの2・7				
5. 14	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口				
5. 21	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口				
6. 4	・野幌自然観察会（悪天候のため中止）				
6. 5	・会報誌「エゾマツ」33号 発行				
6. 25	・ニセコの自然観察会（神仙沼周辺）				
7. 9	・「恵庭の自然」観察会（恵庭公園）				
8. 3	・8月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）				
8. 11	・第16回 ボランティア・リーダー育成研修会 新得町トムラウシ東大雪荘				
~13					
8. 20	・「真駒内の自然」観察会（真駒内保安林）				
9. 3	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園）				
9. 11	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7				
9. 18	・役員会 於：かでの2・7				

西暦	年号	月 日	活 動 内 容
1995	平成 7	10. 5	・会報誌「エゾマツ」34号 発行
		10. 22	・秋の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口
		11. 19	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園） 下見 11.12
		11. 28	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
1996	平成 8	12. 7	・12月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		1. 11	・1月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		1. 19	・役員会 於：かでの2・7
		1. 20	・会報誌「エゾマツ」35号 発行
		2. 20	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
		2. 18	・観察会「滝野の森を歩く」 滝野すずらん丘陵公園 下見
		2. 25	・観察会「滝野の森を歩く」 滝野すずらん丘陵公園
		3. 2	・冬の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口
		3. 3	・冬の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口
		3. 21	・10周年記念事業委員会 於：かでの2・7
		3. 25	・会報誌「エゾマツ」36号 発行
		3. 29	・三役会議 於：かでの2・7
		4. 5	・役員会 於：かでの2・7
		4. 13	・平成8年度 定期総会 於：かでの2・7 13:30~ 研修会 15:00~ 総会
		4. 18	・4月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		5. 10	・役員会 於：かでの2・7
		5. 14	・記念事業実行委員会
		5. 19	・春の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）大沢口
		6. 2	・野幌自然観察会
		6. 10	・会報誌「エゾマツ」37号 発行
		6. 30	・ニセコの自然観察会（神仙沼周辺）
		7. 14	・「恵庭の自然」観察会（恵庭公園）
		7. 18	・7月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		7. 19	・第17回 ボランティア・レンジャー育成研修会 月形町皆楽園はな工房
		8. 1	・8月の森の観察会（森林公園事務所主催 協力参加）
		8. 11	・「真駒内の自然」観察会（真駒内保安林）
		9. 1	・野幌自然観察の集い（野幌森林公園）
		9. 18	・役員会 於：かでの2・7
9. 29	・利根別の自然観察会（岩見沢市利根別自然休養林）		
10. 20	・秋の森の観察会（森林公園事務所主催 協力下見）大沢口		
10. 20	・会報誌「エゾマツ」38号 発行		

歴代三役・各部長一覧

西暦	年号	会 長	副 会 長	事 務 局 長	総 務 部 長	研 修 部 長	広 報 部 長
1987	62	河村 千束	大友 健・高橋 美子				
1988	63	"	" "		野月筆雄	村上紀道	小山賢一郎
1989	64 元	"	" "		"	"	"
1990	2	"	大友 健・八戸克巳		鈴木広司	住吉光子	佐々木 幸夫
1991	3	"	" "		"	"	"
1992	4	河村 千束 (4.18退)	" "		"	"	"
		大友 健	八戸克美・佐々木幸夫	5年度より 事務局長設置	木村 万治郎	山口慶彦	瀧谷尚弘
1993	5	"	" "	田中潤朗	"	山口慶彦 (9.30退)	"
1994	6	大友 健	佐々木幸夫・川端功治	佐々木幸夫	佐藤健一	瀧谷尚弘	田村允郁
1995	7	"	" "	"	"	"	"
1996	8	"	" "	"	"	"	"

ボランティア・レンジャー育成研修会10年の歩み

回数	西暦	年号	期 間	場 所	その他(参加数)
1	1986	61	8.29~31	千歳市支笏湖	
2	1987	62	8.22~23	七飯町林業研修センター	
3	1988	63	7.29~31	標茶町青少年体育センター	
4	1989	元	7.19~21	東川町旭岳温泉	
5	1990	2	7.20~22	様似町アポイ岳	
6	1990	2	8.3~5	野幌森林公園	
7	1990	2	8.24~26	標茶町シラルトロ湖	
8	1991	3	8.1~3	丸瀬布町いこいの森	
9	1991	3	9.5~7	真狩村羊蹄青少年の森	
10	1991	3	10.3~5	当別町道民の森	
11	1992	4	6.11~13	芽室町新嵐山荘	
12	1992	4	7.23~25	芦別市芦別温泉	
13	1992	4	8.20~22	白老町ポロト湖	
14	1993	5	8.6~8	厚沢部町山林開発センター	
15	1994	6	7.29~31	美深町美深森林公園	
16	1995	7	8.11~13	新得町トムラカシ温泉 東大雪荘	1回から17回までの 研修修了者 617名
17	1996	8	7.19~21	月形町皆楽園はな工房	

平成8年 総会報告

平成8年度の活動も半年が経過しましたが、4月の総会で承認された活動計画に沿って進められています。本年度の総会の報告については、議案書のみが広報誌「エゾマツ」37号に掲載されました。総会の経過についての報告は議案書と共に報告されるべきでしたが、手違いにより本号で報告することになってしまいました。ご了解ください。

「かでの2・7」10階 視聴覚室で、4月13日(土)の午後研修会、平成8年度第11回定期総会と、懇親会は会場を移動して中央区北2条西7丁目地下1階「ユック」で行ないました。

研修会は13:00~14:50で、最初は「樹木に魅せられて」伊達興治さん(第16期副会長で増木野舎に魅せられて「北海道の樹木と人」の著者)、 「森の案内人をめざして」浅野正嗣さん(第16期副)、 「江別のホテル」西脇昭夫さん(第16期副)の講師の先生を予定していましたが、伊達さんは人事移動で東京都に転勤になり、浅野さんと西脇さんをお願いしました。

浅野さんは自分の勤務地(旭市)の管内で、月1回の自然観察会を実施しています。会報「エゾマツ」第37号に掲載されていましたが、中味は余り格調の高いものでなく、参加者のなかから自然と講師になって説明してくれる方々がおられ、主催者側はみんなが森の中に集まる機会を作っていることでほぼ完了するとか、この手法もなかなか非凡なもので、お主やるな……の感あり、北海道ボランティア・レンジャー協議会でも手とり足とりの自然観察会でない形のものを取り入れたらと、思いました。

西脇さんはホテルの生息地である江別の植苗川の河川改修の自然に優しい手法など観察会を含め、自然保護と環境保全への地道な活動を中心に、両方ともスライドを主体にお話をしてくれました。お忙しいなか、当方の希望を受け入れて頂きましたことを厚くお礼申し上げます。

総会は15:00~17:00で、参加者48名、委任状70名、計148名で総会が成立したことを確認(79.7%)し、議長は昨年とおなじ佐藤善也さん(第13期)を選任しました。

議事録署名人には成田伸一さん(第10期)と小林文男さん(第13期)を指名しました。議事は「エゾマツ」第37号に掲載しました第11回定期総会議案書により進められましたが、第1号議案から第8号議案まで、提案どおり承認されました。

10周年記念事業の募金につきましては、現在103名で295,310円と寄付金1名100,000円の計395,310円になっています。ご協力の各位には改めて厚くお礼申し上げます。また、何かの都合で忘れていたという各位には、改めてご趣旨をご理解願ひ協力くださるようお願いいたします。

今回は、役員改選がありました。役員になられた各位には、何かとご多用と思いますが本年度と来年度の2ヵ年、会の運営に精力的な活動をお願いします。

さて、総会終了後懇親会に移りました。参加者41名、来賓の皆さんと仲間が、和気藹藹のうちに経過し、所定の時間が短く感じられる雰囲気でした。来年度の第12回定期総会は、より内容の充実したものにしたいと思いますので、一人でも多くの出席者を期待しています。



**第2回役員会で平成8年度～9年度の
地方幹事が決る**

地方幹事は、その地域の情報提供者です。地方と常に密接な連絡のもとによりよい協議会でありたいと願っています。

9月18日の第2回役員会で下記のとおり、地方幹事が決定されました。地方幹事の皆さんは何かとご多忙のところ恐縮ですが、よろしくお願いします。

担当	氏名	郵便番号と住所	電話番号	備考
渡島	白井 信二	041-11 旭川市七軒町154-1	0138-65-9821	
後志	池田 郁郎	048-14 旭川市二ツ町ニヒコ482	0138-58-2623	
胆振	堀尾 博義	059-09 白老町柳屋2丁目11-6	0144-82-3870	
上川	野呂 一夫	078-13 川端町4条3丁目		
十勝	池田 啓介	080 釧路市18条2丁目11-18	0155-33-3069	
網走	和泉 勇	090 北見市西町309-3	0157-22-2359	
釧路	佐々木 文雄	085 釧路市6丁目2-2	0154-41-5750	
空知	寺山 昇	068 岩見沢市東町109-80	0126-24-4262	
檜山	浅野 正嗣	043 旭川市東町408	01395-2-5873	
留萌	酒井 一夫	098-36 留萌市南町177	01646-5-4668	

今後の自然観察会

協議会主催または協力する自然観察会は下記のとおりですが、本番・下見に限らずそれ以外の日で、野幌その他の森で勉強したい会員は、ご遠慮なく事務局に申し出ください。

自然観察会名	主催	日 時	下見日時	集合場所
秋の森の観察会	燧轉新	10月20日 9:30~14:00	10月13日 9:30~14:00	野幌森公園大沢口
野幌の自然	燧転新	11月17日 10:00~12:00	11月10日 10:00~12:00	北海道福山館
12月の森の観察会	燧轉新	12月 5日 10:00~12:00	12月 3日 10:00~12:00	北海道福山館
1月の森の観察会	燧轉新	1月 9日 10:00~12:00	1月 7日 10:00~12:00	北海道福山館
野幌の冬の森	燧転新	2月23日 10:00~12:00	2月16日 10:00~12:00	北海道福山館
滝野の森を歩く	燧転新	3月 2日 10:00~12:00	3月 1日 10:00~12:00	滝野5分森公園
冬の森の観察会	燧轉新	3月23日 9:30~14:00	3月16日 9:30~14:00	野幌森公園大沢口
野幌カール自然観察会	平成8年10月12日(土) 10:00~12:00			野幌森公園大沢口
江神中央緑地自然観察会	10月23日(木) 10:00~14:00			野幌森公園大沢口
ななかま公園自然観察会	10月1日・2日(祝) 10:00~14:00			野幌森公園大沢口

お詫と訂正

会報「エゾマツ」No.37のP29平成8年度主催・共催する北海道ボランティア・レンジャー協議会の自然観察会一覧 *「利根別の自然」9月22日(日)は、9月29日(日)の誤りでした。お詫び申し上げます、訂正いたします。

お願い

平成8年度の年会費3,000円、同封の郵便為替で振り込み願います。口座番号は02780-3-21442 加入者名は北海道ボランティア・レンジャー協議会です。なお、不明の点などありましたら、会計担当理事小淵修子(〒004 札幌市東区南一条4丁目15-2-12 03 電 (011)893-6309)にお問い合わせください。

◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

紅葉のたよりが、高山より平地に下りてきました。野山が赤や黄に変わってきましたが、毎年繰り返される季節の中に身をおき、自然のありがたさを感じている今日このごろです。

さて、本会結成10周年の記念事業の一つとして、会報誌38号(10周年特集号)ができあがりました。この号は10周年の節目にあたり、会の歩みを整理したり、新たな発展のために、会員の皆様からアンケート調査を行いその結果をまとめています。また、会員一人ひとりが独自に活動されている実践の様子なども取り上げてみました。原稿の依頼やアンケート調査に快く協力いただきました皆様に心より感謝いたします。会員の皆様の声をどうすれば広報活動に反映できるのか、10年という節目にあたり、改めて問い直していきたいと思っています。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」38号 1996.10.20 発行

発行責任者 大 友 健

(表紙題字 岡田 弘保 元生活環境部長)

